

荷物をすっかり片付けた部屋を見渡せば、こんなに広かったのかとしみじみとする。新しい部屋へ持っていくものは最低限で、価値のありそうな絵画やドレス、宝石の類はすべて借金のカタに持っていかれてしまった。唯一最後まで残ってくれた執事のルカは申し訳なさそうに頭を垂れた。

「なんて顔をしているの、ルカ。心配しないで」

「っ、しかし。暇をいただくという話、考え直してはいただけませんか」

いつも厳しい年上の使用人としてわたしに接していたルカが動揺するものだから、わたしは少し笑ってしまう。父親に大恩があると常日頃から言っているルカが、わたしを心配するのは自然なことだ。その父親は事業が失敗したことをきっかけに持病が悪化し、すでにこの世にない。残された一人娘を案じる彼の気持ちもわかるけれども、わたしは彼に報いることはできないのだ。

「あなたの心遣いには感謝しているわ。でも、わたしにはもうあなたの気持ちに報

いるだけの、先立つものも何もないの。これ以上言わせないでちょうだい」

「——っ、かしこまりました。お嬢さま」

ルカは眉を寄せて、痛ましそうな表情をしたあと、深々と頭を下げた。

そうして先祖代々引き継いできた屋敷も調度も人手に渡って身一つになったわたしは、日々の生活を成り立たせるために奔走した。

なんとかわたしは、貴族令嬢として身に着けた教養を生かして、家庭教師としての職を得ることができた。裕福な商人たちは、機会があれば貴族と縁続きになりたいて狙っているから取り立てて特技もないわたしでも仕事には困らないのが幸いだった。娘たちに礼儀作法を教えるささやかな生活にも慣れたある日、家にルカが訪ねてきた。少し癖のある黒髪を後ろになでつけて、洗練された衣装に身を包んだ彼は、執事をしていたころよりも羽振りがよさそうだった。

「ご無沙汰しております、お嬢さま」

「ルカ、いったいどうしたの？」

久しぶりに会ったルカは相変わらず生真面目そうな顔で、背筋はピンと伸びていた。しかし、少し顔がやつれて、怜悯な印象を与える切れ長の黒曜石のような瞳は、すこみが増した気がする。淹れたお茶に手をつけないまま、わたしの顔をじっと見つめているルカに、わたしは困惑した。

「今は宝石商をしているんです。もう少ししたら独立できそうなんですよ」

わたしの家は代々領地から宝石を算出する鉱山を持っていた。しかし長年の乱獲で産出量が減ってしまい、父の代には枯渇してしまったのだ。その損失をほかの事業で補填しようとしたが上手くいかず、父は失意のうちに亡くなったというわけだ。

家業の手伝いもしていたルカは、父が及ばないほどの目利きの腕がある。加えて勤勉で、粘り強い交渉も得意だった。父よりもよほどうまく商売ができるだろう。

「そうなの、すごいわ。さすがルカね」

「それで事業がうまくいけば、お屋敷をお嬢さまの手買い戻そうと思うのです。あのときは力及ばず、みすみす屋敷を手放すことになってしまいましたが、あのようないじめな思い、もう二度とヴェレーナさまにはさせませんから」

まっすぐに瞳を見つめられて、どきりとする。真剣なまなざしにきゆうつと胸が

締め付けられた。

「……ルカの気持ちはありがたいけれど、必要ないわ。あれはお父様とわたしの始末だもの。それに、以前ほど贅沢はできないけれど、日々の生活には困っていないからやっていけるし、わたしは今の生活に特段不満もないの」

「し、しかしあれは先祖代々大切に受け継がれてきたお屋敷ではありませんか。旦那様もお嬢さまに引き継いでいただきたいはずです」

なおも食い下がるルカに、わたしは黙って首を横に振る。

「ルカの気持ちはありがたいけれど、あなたはもううちの執事ではないのよ。それにわたしも、あなたの主人ではないの。献身に報いることもできないのにあなたにそんなことをさせたとあっては、お父様に夢枕で叱られてしまうわ」

「たとえばヴェレーナさまから給金をいただいていなかったとしても、わたしの主人はお嬢さまですよ」

引き下がる気のないルカにわたしはふうと息を吐き出してあることを思い出す。厳しくも優しいルカに、幼いころのわたしはよく大きくなったら結婚してねだったものだ。幼い子どもの冗談でも彼はたしなめるばかりでうなずいてくれることなどなかったが。

「ねえ、ルカ。もうわたしはあなたのお嬢さまではないのよ。それとも、もっと特別な関係になる？」

わたしは男慣れしている艶っぽい女性のように、手袋越しに彼の骨ばった指を撫でる。

「お、じょうさま。なにを」

「もうわたしはお嬢さまじゃないわ。それとも、そんなにわたしって魅力がないかしら」

産後の肥立ちが悪く、そのまま帰らぬ人となった母に、わたしはよく似ていると

いわれていた。肖像画でしか知らない母は、銀髪の長い髪に青い瞳をした理知的な美人で、父や使用人たちはわたしを彼女に瓜二つだといって褒めた。だから自分でも器量はそこそこのいいと思っている。

「あなたにとっては子どもの戯言だったかもしれないけれど、わたしの気持ちはいまでもかわらないわ。それにわたしはもう大人の女性なの。疑うなら今すぐ試してみて？」

につこりと微笑みながら、ぎしりとベッドに腰かける。わたしの知るルカならば、顔を赤くして怒り出すだろう。女性としての慎みに欠ける振舞いだとお説教がはじまるかもしれない。

さてどんな反応をするかと微笑みながら、待ち構えていると、もう一人分の体重をかけられたベッドがぎしりと軋んだ。

「本気なんですか、お嬢さま」

整った顔にうつすらと浮き出た目元の皺が見える。わたしが知らない年月を感じさせて少し寂しく、自然と手を伸ばしてしまった。払いのけられるかと思ったけれど、わたしの指先は簡単にルカの脛に触れる。

「本気よ。それとも、やっぱりわたしのことは女性としてみれないかしら？」

挑発するようにドレスのボタンを外す。下着がちらりと見えるくらいまで前をはだけせて、ルカの顔をのぞき込む。涼しい顔をしているかと思いきや、耳まで真っ赤に染めて彼はごくりと喉を鳴らす。

「……ヴェレーナさまは本当に美しく成長あそばされました。あまり忠実な使用人をからかわないでいただきたい」

「あら、あなたがそんな顔をするなんて驚きだわ。てっきりお父様への忠誠心だけでわたしに会いに来たと思っていたのに」

思わず本音を漏らせば、ルカの顔つきがかわる。わたしの肩を抱き寄せ、細い身

体をすっぽりと腕の中に収めてしまう。

「え、る、ルカ？」

「旦那様への忠義心だけで、あなたに会いに来るはずないでしょう。小さいころから俺を慕って後ろをついてきたあなたが、かわいくてしかたなかったんですよ。いずれしかるべき方と結婚される大切なお嬢さまだと思って我慢してきましたが、いまやあなたを守るのには俺しかない」

整った顔が近づいてきて、噛みつくようなキスをされる。敏感な口腔に舌がねじ込まれて、敏感な部分を犯していく。熱いぬるついた舌が、薄い粘膜をなぞる感覚。はじめての感覚に困惑して、身体が縮みあがってしまう。

「んっ♡はっ♡はあっ♡」

なにがなんだかわからないまま、キスの合間に呼吸をするだけで精いっぱいだった。キスされただけなのに、肩で大きく息をするわたしを見て、ルカはくすりと笑

う。

「淑女たるもの貞淑を守らなければならないという教えを守ってくださいったよう
でうれしいですよ。もしかして、キスもはじめてですか？」

「っ、そうよ、わるい？」

「まさか。光栄ですよ、あなたにはじめてを教えるのがほかならぬ俺だというのは」
ルカは満足そうに笑って、もう一度わたしの唇を奪う。触れるだけのキスをする
と、ちゅっという音とともにすぐに離れた。

「さて、身持ちの固いヴェレーナさまが怖がらないようにじっくりと解して差し上
げなくては」

ルカはわたしのコルセットを緩め、下着をはぎ取っていく。あっという間に一糸
まとわぬ姿にされて、思わず胸を手で覆ってしまう。

「こら、だめですよお嬢さま。せっかくお綺麗なカラダなのですから、隠しては」

指を絡められ、ベッドに腕を縫い付けられる。双丘がぶるんつと震えて恥ずかしい。視線を感じると、胸の飾りがひとりでにぷくりと尖ってしまう。

「はは、見られるだけで感じているんですか？ほんとうにかわいらしい方だ」

視線を感じただけで兆し始めている先端の飾りを、長い指で見せつけるようにきゅっ♡とつままれる。軽く指で挟まれて力を込められただけなのに、ぞわっと背中が粟立った。

「ああっ♡はっ、うんっ♡」

「おや、お嬢さまは感じやすいんですね。こんなにすぐ硬くしてしまっ」

ルカは声を弾ませながら、固く尖った乳首をきゅっ♡きゅっ♡とまるで搾乳するように絞っていく。糸をこよるように乳首を左右にひねられては、じんわりとした甘い感覚がお腹へ溜まっていく。

「あっ♡はあっ♡あ、あっ♡やんっ♡♡」

「おや、腰がいやらしく揺れてしまってますね♡よろしいですよ、もっと気持ちよくなってくださいませ」

ぷつくりと膨らんだ乳首を指でぎゅむぎゅむと押しつぶされる。指でゆつくりと圧迫されて、固い芯を押しつぶされるたびに、背中がビクビクと痙攣されてしまう。「ヴェレーナさま、ほんとうに感じやすいんですね♡いままでふしだらな男にこの身体を暴かれなくてよかった。これからは俺がたくさんかわいがって差し上げますね♡」

微笑んでルカは、乳首に軽く爪を立てる。先端の窪みに爪をねじ込んでほじくられるように引っかかれると、お腹の奥が切なくなってしまう。

「ん♡あ♡き、もちいい♡」

喉を反らして喘げば、ルカは目を細めて笑う。こんなやさしい顔、屋敷にいたときすら数えるほどしか見たことがない。それなのに、愛撫するときにいとおしそう

にするなんてずるい。安心して、気持ちよくなつていいと甘やかされているみたいだ。

「顔を蕩けさせて、お嬢さまは本当に乳首が好きなんです♥では、こういうのはどうですか？」

「え？あっああっ？！」

ピンピンに立ち上がった乳首をルカはぱくりと口に含む。散々爪でカリカリされて、敏感に腫れあがった乳首にざらざらした舌が触れていく。乳輪が生温かい口の中に招き入れられて、ちゅぱちゅぱと吸い上げられる。指とは違う、ぬるついた刺激に腰が自然と浮き上がってしまう。舐められるだけでもおかしくなりそうなのに、もう片方の乳首もずっと指でこねられる。リズムも強さも違う刺激に腰が勝手に突き出てしまう。誰にも触れさせたことのない秘穴が勝手にぬかるんでいくのがわかる。クチュリと小さく響いた水音が、どうかルカに聞こえていませんようにと

ぎゅつと目を閉じる。

「あ♡や、そ、れっ♡しゅきっ♡」

乳首をあたたかいクチのナカに招き入れられて、唇で挟まれて全体を絞られながら、先っぽに舌を押し当てられる♡媚びるように腰がくねり出して、自分じゃ止められない♡

はじめてなのにこんなに気持ちよくなって呆れられてないかしら。心配になってルカの顔を覗けば、心底愉快そうに目を細めている。わたしの視線に気が付いたのか、ルカはにやりと笑って、水音を立てながら乳首を啜るように力強くしゃぶった。

「ひんっ♡あひっ♡」

いままでない感覚に思わずシートをぎゅつと握る。喉を晒しながら喘ぐわたしに、ルカは声を立てて笑った。

「はは、お嬢さま。すっかり成熟されたいやらしい女の身体に成長あそばされまし

たね♡こんなに乳首をビンビンにして俺におっぱいしゃぶられるのが気持ちいいんですか？」

ルカに意地悪く問われると、お腹の奥が甘く疼いてとろっとした愛液が太ももを伝っていく。

「う、うん、ルカにおっぱいしゃぶられて、気持ちよくなってるのおっ♡」

「ふふ、ヴェレーナさまが俺で気持ちよくなってくれて光栄ですよ♡ではもっと感じてください」

ルカは尖らせた舌を乳頭のくぼみにねじ込んで、じゅるっと音を立てて吸い上げた。それと同時にもう片方の指で勃起した乳首をぎゅっとつまみ上げる。

「あ♡や、はげしっ♡んあっ♡」

胸を突き出しながら喘ぐわたしに、ルカはご満悦に笑う。ざらついた舌の粘膜で乳首を転がされ、根元から先端に向けてしこしことしごかれて、腰ががくがくと動

いてしまう♡

「ひんっ♡ああっ♡いくっ♡」

溜まった熱が弾けるような感覚に、背中を仰け反らせる。全身がびくびくと痙攣して、秘部からこぼりと愛液があふれ出てシートへ垂れる。

「あ♡はーっ♡はーっ♡」

気持ちいい余韻がずっと残ったまま、太ももを震わせて肩で息をする。

「はは♡お嬢さま、乳首だけでイッてしまったんですね♡本当にいやらしくてかわいらしいですよ♡」

ルカは震える太ももを左右に開いて、濡れそぼった秘部をじいっと眺める。ひくひく♡と物欲しげに震えるおマンコを見られるのが恥ずかしくて必死に足を閉じようとするのにルカはそれを許してくれない。

「や、やだあ。ルカあまり見ないで……」

弱弱しい声で懇願するけれど、ルカはお願いをきいてくれない。それどころか、意地悪に口元を歪めて、視線で犯してくる。

「恥ずかしがることはありませんよ。こんなに淫靡で美しいのですから。ふふ、ヴェレーナさまのおマンコはすっかり出来上がってしまってますね♡かわいいお豆さんも大きくなって触ってほしそうにしますよ♡」

ルカは微笑みながらわたしの足の間に顔を埋めていく。まさか、と思った瞬間には敏感なクリトリスが熱い粘膜に招き入れられていた。戸惑いながらもやめさせなければと、頭を押し返すのに甘い痺れに力が入らない♡

「やつ♡あ、そんなところ、き、きたないからあっ♡あっ♡」

「ヴェレーナさまのお身体で、汚いところなどありませんよ♡」

ざらついた舌の表面で舐められるだけで、膨れ上がったクリトリスは敏感に刺激を拾いトロトロとした愛液を垂れ流してしまう。恥ずかしいのにたまらなく気持ち

よくてもっと舐めてほしいと、腰を勝手にヘコヘコと突き出してしまふ。

「あ♡だめ、だめなのいっ♡きもちいっ♡クリトリス、クンニされるのきもちいいのぉ♡」

うわごとのように喘ぐわたしに氣をよくしたのか、ルカは大きな水音を立てながら愛液を啜る。じゅるじゅると下品な音を立てて吸われて、敏感な肉豆がブルブルと震える。腰がガクガク震え始める。甘い痺れが身体を襲う間隔が狭くなって、このままだと弾けてしまふ。

「あ♡はひ、だめっ♡ルカあ♡♡なんかくるうっ♡」

困惑しながら叫ぶわたしに、ルカはにっこりと微笑んで膨れ上がったクリトリスを唇で食んだ。根元から先端まで唇でぎゅむぎゅむと優しく押しつぶしながら、じゅうっ♡と吸引する。弱いところを全部責めたてられて、唇でしごかれて、わたしはあっけなく背中を反らして絶頂してしまった♡

「んあっ♡いぐっ♡いっぐうううっ♡」

びくんっ♡びくんっ♡と跳ねる身体を抑えつけて、ルカはさらに追い打ちをかける。ふるふると震えるクリトリスの先端を舌でほじくられると、絶頂から降りてこられない♡

「な、んで♡も、もうイってるのに♡」

口元を愛液で濡らしながら、ルカは目を細める。

「ヴェレーナお嬢さまが俺で感じてくださるのがうれしくて、つい意地悪したくなっちゃいました♡」

ルカは膨らんだ恥丘にちゅっ♡とキスをして、指で肉ビラをかき分けた。濡れそばった秘穴にぬるりとしたものが触れて、熱い舌をねじ込まれた。

「ひっ♡や、なに？♡」

「ふふ、ヴェレーナさまのここ痙攣してイキっぱなしですね♡俺の舌にまでブルブ

ルしているのが伝わってきますよ♡」

ふにっ♡と唇をおマンコに押し付けて、膣内にたまった愛液を啜り出すように吸い上げながら、熱く肉厚な舌を痙攣しているおマンコの奥へねじ込んでいく。秘豆の裏側にぬるっとしたものを触れて腰がビクンと跳ねあがってしまう。

「はは♡ヴェレーナさまはここがスキなんです♡」

肉芽の裏側のざらざらした部分を執拗に舐め上げられる。きゅう♡きゅう♡と勝手に蜜穴がうねって、ルカの舌を締め付けていく♡

「ヴェレーナさまは本当におマンコ舐められるのが好きみたいですね♡ご期待にもっと添えるように頑張りますね♡」